

復活　そして命

ヨハネ一・二七～三七

今日、イエスはただ状況に振り回されているように見えます。死に瀕したラザロのもとにいくのが間に合わず、到着した時にはすでに死から四日もたっていた。村人たちが彼の姉妹を慰めに集まっていた。マルタもマリアも口をそろえるようにして言う。主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」。その場の人々がみな泣く中、イエスは　心に憤りを覚え、興奮して「尋ねる。どこに葬ったのか」。こんな取り乱したかに見えるイエスは、あまり例がありません。だつたらもつと早く来てくれればよかつたのに……。極みは三五節。イエスは涙を流された」。英語でJesus wept。原語もたった一語、聖書で最も短い節の一つ。後代の人々が聖

書に節を入れる際、たった二語で十分、これだけでいいと判断したということ。ここでイエスは何も語りません。ただ、涙する。

臨床心理学を学んだ方からきいたことがあります。カウンセリングの基本は相手を受容すること、と。受容とは、いつもあなたのおそばにいます、ずっと一緒にいさせてくださいね、それを相手に認めてもらうこと。もしここにいてくださいましたら」とマリアは言うが、イエスは「緒に」いなかつたのだろうか？　いいえ。

イエスは涙を流された。人間は別れを嘆き涙します。しかし、イエスの涙は違う。別れたものとながるために流される。弱く傷つき、すべて世界から引き離されたと感じるときも、なお私のために涙してくださる方がいる。その事実が私たちを慰さめ、励ます。時を隔ててなお、悲しみのただ中で、私たちはイエスと共にいる。イエスの涙はラザロにも命を与えました。